

雜 報

會 員 動 靜

陸軍三等軍醫正八位 大 熊 泰 治
任岡山醫科大學助教授
敘高等官七等

岡山醫科大學助教授 大 熊 泰 治
本俸十級俸下賜
職務俸金五百圓下賜 (三月一日)

陸軍一等軍醫從六位勳六等 中 田 正 景
(各通) 陸軍一等軍醫從六位勳五等 石 井 義 章
陸軍一等軍醫從六位勳六等 矢 野 義 德
任陸軍三等軍醫正

陸軍三等軍醫正 矢 野 義 德
補步兵第二十七聯隊附
和歌山南成病院附
陸軍三等軍醫正 南 川 義 一

免本職補野砲兵第六聯隊附 (三月二日)
鎮海防備隊軍醫長兼分隊長鎮
海要港部部員海軍軍醫大尉 伊 藤 不 羈 夫

免本職並兼職
待命被仰付但横須賀ニ
滞在スヘシ (三月十日)

陸軍二等軍醫從七位勳六等 後 藤 英 明
陸軍二等軍醫從七位勳六等 小 出 宗 次
(各通) 陸軍二等軍醫從七位勳六等 大 橋 要 人
陸軍二等軍醫從七位勳六等 西 村 英 二
任陸軍一等軍醫

(三月十一日)
大阪衛戍病院附陸軍一等軍醫 小 出 宗 次
免本職補步兵第二十一聯隊附
步兵第二十七聯隊
附陸軍二等軍醫 寺 坂 幸 太 郎
免本職步兵第二十七聯隊附被仰付
(三月十日)

敘從五位 正六位勳四等 若 月 館 一
(三月十五日)

深山重砲兵聯隊
附陸軍二等軍醫 明 渡 侃 治
免本職補步兵第七十六聯隊附
(三月十六日)

- 大熊 泰 治君 別項の如く今般岡山醫科大學助教授に任せられたる大熊泰治君の略歴は左の如し
大正十五年九月第一高等學校を経て東京帝國大學醫學部に入學し同九年十二月同學部卒業す
大正十年三月東大帝國大學助手に任せられ醫學部附屬醫院精神科勤務を命せらる
大正十三年四月東京府立松澤病院醫員を命せらる
同年十月岡山醫科大學精神學講師を囑託せられて今日に至れり
- 關 正 次君 曩に在外研學生として歐米諸國に在留を命せられたる同君は本月二十五日當地出發二十六日神
戶解纜の摩耶丸にて上海に向て出發せられたり而して同地にて更に獨逸船に乗換へらるる苦なり
- 上田正治郎君 は今般神戸市上筒井通一丁目高橋病院に勤務せられたり
- 笹 屋 昌 平君 は今般廣島縣立吳診療院に轉勤せられたり
- 磯 野 隣 夫君 は據て岡山醫科大學産婦人科教室に勤務し居られしか今般同教室を辭し愛媛縣西條町西條病院
に於て診療に従事せられたり
- 北 光 三君 は今般和歌山市二里ヶ濱厚生館病院長に就任せられたり
- 田 岡 清 夫君 は大正八年以來在京研究に従事し居られしか今般歸郷徳島市新町橋通に於て開業せられたり

- 宗野正君 は今般大阪市西成區東萩町に移轉せられたり
- 得津慶一君 は今般和歌山市新中通六丁目に病院新築移轉せられたり
- 細野季彦君(舊姓淺野) は今般神戸市東須磨西ノ口に於て開業せられたり
- 田中公明君 は今般愛媛縣温泉郡川上村に於て開業せられたり
- 三宅良一君 は今般廣島市水主町に移轉開業せられたり

鈴木録郎君逝く 君は卒業試験當初より微恙ありしも病を力めて受験せられし爲め漸次増悪せるを以て種々療養に手を盡されしも其效無く去二十一日遂に逝去せられたりと洵に痛惜に堪へず

◎學位授與 足立實君は論文を大阪醫科大學に提出し學位を請求し居られしか本月六日醫學博士を授與せられたり其主論文は左の如し

1. 人胎盤注射ニヨル人工黃體發生ニ就テ 其一
2. 人胎盤注射ニヨル人工黃體發生ニ就テ 其二
3. 人胎盤注射ニヨル人工黃體發生ニ就テ 其三

藤原政雄、武田三郎の兩君は論文を岡山醫科大學に提出し學位を請求し居られしか本月七日醫學博士の學位を授與せられたり兩君の主論文及び参考論文は左の如し

藤原政雄君の分

主論文

消化管粘膜ニ於ケル糖原生成ニ關スル研究 (英文)

第一回報告 (大正十三年十二月本會雜誌ニ發表)

第二回報告 (大正十三年十月本會雜誌ニ發表)

第三回報告 (大正十四年四月本會雜誌ニ發表)

参考論文

1. 哺乳動物ニ於ケル非經口的輸入糖ノ運命ニ就テ (英文)

(大正十四年五月本會雜誌ニ發表)

2. 膝リパーゼノ機能ニ關スル研究 (英文)

(大正十四年十一月本會雜誌ニ發表)

3. 「ステアブレン」作用ニ對スル「アルコール」及「レチチン」ノ影響ニ就テ (獨文)

(大正十四年九月本會雜誌ニ發表)

4. 白鼠ノ消化管竝ニ四肢長管狀骨ノ生後發育ニ對スル形態學的研究 (英文) (伊藤幸憲、藤原政雄共著)

(大正十四年三月、四月本會雜誌ニ發表)

5. 糖磷酸「エステル」ノ骨酵素ニ因スル分解竝ニ骨折ニ對スル該「エステル」ノ影響ニ就テ (英文) (伊藤幸憲、藤原政雄共著)

(大正十四年六月本會雜誌ニ發表)

武田三郎君の分

主論文

上皮小體ト胃腸運動 (邦文)

(大正十四年三月朝鮮醫學會雜誌ニ發表)

參考論文

1. 流行性感胃ニ併發セル肺炎ノ臨牀的觀察 (邦文)
(大正八年四月臨牀醫學第七年第四號ニ發表)^m
2. 腸蠅幼蟲症ノ一例 (邦文)
(大正九年八月東京醫事新誌第二一〇九號ニ發表)
3. 痘瘡性紫斑病ノ一例 (邦文)
(大正十一年三、四月東京醫事新誌第二二七〇、第二二七二號ニ發表)
4. 期外收縮ヲ伴ヘル完全房室分離症ノ一例 (邦文)
(大正十一年十二月朝鮮醫學會雜誌第四〇號ニ發表)
5. 胃内容及ヒ内壓ノ血壓竝ニ呼吸ニ及ボス影響ニ就テ (邦文)
(大正十二年四月朝鮮醫學會雜誌第四二號ニ發表)
6. 胃壁内「クロール」ノ分佈状態竝ニ二三ノ要約ニ於ケル觀察 (邦文)
(大正十二年五、六月東京醫事新誌第二三三〇、第二三三二號ニ發表)
7. 急性胃擴張症ノ原因ハ果シテ神經性ナルカ (邦文) (岩井誠四郎ト共著)
(大正十二年八月朝鮮醫學會雜誌第四號ニ發表)
8. 外部神經支配ト胃ノ官能 (邦文) (岩井誠四郎ト共著)
9. 「ストロンゲロイテス、ステルコラーリス」症ノ一例 (邦文) (李載澤ト共著)
(大正十三年十月朝鮮醫學會雜誌第五〇號ニ發表)

◎卒業生 岡山醫科大學に於ては本月二十五日第一回卒業生左記二十三人に卒業證書を授與セリ(イロハ順)

伊丹訓吾	早川政俊	西村伊勢松	西田實雄	奥山美佐雄
渡邊九郎	渡邊傳二	金光康生	竹内道真	中澤齋行
中村博郷	前田謙二	藤田富豊	藤川良雄	小池藤太郎
岸岡精華	三宅郁多	宮崎哲	進藤直作	廣川濟
須藤五一郎	菅田濱	鈴木鐸郎		

◎新卒業生諸君の消息 今般岡山醫科大學を卒業せられたる諸君の消息は左の如し

- 伊丹訓吾君 岡山醫大小兒科教室勤務
- 早川政俊君 岡山醫大病理學教室勤務
- 西村伊勢松君 岡山醫大病理學教室勤務
- 西田實雄君 海軍に出仕
- 奥山美佐雄君 岡山醫大生理學教室勤務
- 渡邊九郎君 岡山醫大肺沼内科教室勤務
- 渡邊傳二君 岡山醫大赤岩外科教室勤務

- 金光康生君 岡山醫大眼科教室勤務
- 竹内道真君 陸軍に出仕
- 中澤篤行君 大阪松岡外科病院勤務
- 中村博郷君 海軍に出仕
- 前田謙二君 南滿鐵道病院に勤務
- 藤田富豐君 岡山醫大柿沼内科教室勤務
- 藤川其雄君 岡山醫大細菌教室勤務
- 小池藤太郎君 岡山醫大皮膚科教室勤務
- 岸岡精華君 岡山醫大津田外科教室勤務
- 三宅郁多君 岡山醫大耳鼻咽喉科教室勤務
- 宮崎哲君 岡山醫大柿沼内科教室勤務
- 進藤直作君 岡山醫大柿沼内科教室勤務
- 廣川濟君 海軍に出仕
- 須藤五一郎君 岡山醫大精神科教室勤務
- 菅田瀧君 陸軍に出仕

◎入學許可 岡山醫科大學にては本年の入學志願者定員を超過せしを以て選抜試験を執行し左記の諸君に入學を許可したり

石原忠之	石川正次	岩崎國衛	岩永勸一	星島忠夫
富田廉三	友廣忠正	飛谷忠弘	太田克	大塚蕃
大重實造	小田源太郎	小川壽	小口貞雄	岡村榮雄
越智幸雄	渡邊武	加藤照夫	河原省平	兼田三郎
横山久衛	吉宗泰次	高見孝志	高橋熊夫	高田弘
田隅克巳	玉井元三	根岸五郎	中西正男	中山一彦
中村孟	中村俊雄	中島秋征	永光軍一	宗盛武雄
浦城二郎	野口武夫	黒田秀隆	厨董	熊井孝三
桑原利勝	山本好之助	山田一郎	松田義秋	松本茂人
松山啓助	小西信雄	古林隆碩	遠藤虎之助	喜多島愼一
水野知文	水谷一輝	澁谷成利	東島辰雄	廣津格
本松明	仙波廣一	菅田士郎	菅龍正	鈴江榮
杉佐助				

◎開業三十年祝賀會 岡山市開業醫有志諸君の發起にて當市内に於て三十年以上の醫術開業者左記諸君の功績を記念し尙ほ其長壽を祝福する爲め本月三日午後五時より市内松之江樓内大正館に於て祝賀會を開催せり出席者は同市醫師會員の殆ど全部出席し尙ほ岡山醫科大學よりも田中學長、赤岩、安藤、好本、柿沼の諸教授も出席せられ非常の盛會なりし

伊原龍三郎	石本於義太	本郷楨衛	岡西龜太郎	岡本錦吉郎
小川知彰	神戸雄俊	河田清造	田中金	難波貫一
山崎章	藤原鐵太郎	江村正路	三谷時太郎	三町弘
廣田謙吉	守屋純太郎	守屋第三	村主齋平	鈴木昌平

◎第二回岡山皮膚科集談會

去る三月六日岡山醫大皮膚科醫局に於て開催、演説抄録は次の如し。

次回は來る六月五日午後二時より皮膚科醫局に開催し、爾後日本皮膚科學會岡山地方會(集談會の續きとして六月の會は第三回と稱す)と改稱し、當會に於ては別に煩雜なる規則は設けず。尙ほ同日は午後五時頃より懇親會開催の豫定なり。懇親會は一年一回簡單なる會合となす。

演 説 抄 録

1. 汎發性列序性皮角症の一例

江原猪知郎君

患者は30歳の男子にして生後3日目頃より全身の皮膚に水疱を生じ、時日を経過するにつれて角化せる突起となりしものにして、顔面、四肢等に硬き角質序列性に排列せるものなり。

2. 扁平紅色苔癬の一例

江原猪知郎君

當地方に於ては割合稀なるを以て之を報告せるものにして、左側腹部に定型的本疾患を有せり。

3. 頭部乳頭狀皮膚炎

藤原 皓君

34歳の男子の後頭部に本症を發生し顔面、胸骨部等に瘰癧息肉を有せり。即ち本症は頭部乳頭狀皮膚炎と同時に瘰癧息肉を有し、息肉形成の體質ある者に膿疱の治癒後本症を結果せるは興味ありと謂ふべし。

4. 頭部膿瘍性潜行性毛嚢周圍炎の一例(患者供覽)

藤原 皓君

60歳の男子に本症を見たるものにして「ラゲウム」、X線等に依り稍々輕快せり。

本症は稀有にして後頭部に始め毛嚢に一致せる膿點を作り次で頑固なる膿瘍を形成し互に癒合、皮下を潜行交通し波動著明にして抜毛容易なり。本患者は全く本症に一致せるも、今日の所見は頭部乳頭狀皮膚炎の像にして兩者の間に密接なる關係あり前者の治癒後後者となることあるべきを想はしむ。

5. 顔面播種狀粟粒性狼瘡の一例(患者供覽)

大道直一君

患者は23歳の女、主として鼻の兩側に本症を生じ、切片には結核菌を證明せり。治療は人工太陽燈とX線療法に兼ねるに「ラゲウム」療法中なり。

6. 壞疽性丘疹狀結核疹の一例

大道直一君

19歳の女子の手及び下腿に本症を發生せる者なり。目下X線深部療法と「ツペルクリン」注射を行ひ、肝油の内服及び塗布にて稍々輕快せり。

7. Bazin氏硬結性紅斑の三例

大道直一君

3人の女子に就き其の兩側下腿に本症を發生せる者を擧ぐ。

8. 膀胱鏡検査後の尿量變化につきて

大道直一君

17例に就きて検査前後數時間中毎1時間毎に尿量を量りしに、2例に於て僅に検査後尿量増したるも他の者には少しも増量せざりき。

9. 尋常性鱗屑疹並に紅斑性狼瘡に就て

内田茂雄君

茲には主として此兩疾患の過去3箇年間に於ける統計的觀察に就きて述ぶべし。

I. 尋常性鱗屑疹

本疾患は比較的稀有なるものにして之を表示すれば

年度	皮膚病患者數	尋常性鱗屑疹	百分率
大正12年	1289	合 3. 女 2. 計 5	0.39%
13年	1227	合 1 計 1	
14年	1376	合 3. 女 2. 計 5	0.36%

附. 同一患者にして2年以上に互り再來せる者は總て1人1回として計算す。

初發年齢は30—40歳の者最も多し。治療甚だ困難にして屢々再發す。

II. 紅斑性狼瘡

年度	皮膚病患者數	紅斑性狼瘡	百分率
大正12年	1289	女 2 計 2	0.23%
13年	1227	合 2. 女 1. 計 3	0.24%
14年	1376	合 3. 女 1. 計 4	0.29%

罹患部位は顔面特に頬部、鼻尖最も多し。

初發年齢は青春期以後の者多く、治療困難なり。

10. 辜丸奇型腫の一例

内田茂雄君

患者天野某男、37歳、岡山縣人。

右側辜丸手拳大以上に増大し自發痛並に壓痛なし。摘出辜丸の剖面は肉眼的には殆ど小水疱の密集より成り、其内容は粘液様透明にして精糸を缺如す、組織的検査に於て囊腫は圓柱上皮を被り諸所に結締組織増殖す、一部には腺様の構造を示す部あり、又軟骨を含有する部あり、且一部筋肉を思はるる物質を有す。細精管尚ほ存在する所あるも壓迫萎縮に陥りたる像を示す。

是等の所見を今日迄の文獻に徴するに内胚葉及び中胚葉より生じたる奇型腫なりと信す。

11. 腎臟機能測定法に就て

中川小四郎君

演者は先づ腎臟機能測定法としての Ambard 氏尿素排泄係數の臨牀的意義を略述し、自家の實驗に基き該法の腎臟機能診定上、「フタレイン」法、人工多尿法又は血液結水點測定法等と同じく實地的に推稱す可き一法なることを説き、次で Guerbet 氏の考案せる係數測定器 Abaque pour le Calcul de la Constante d' Ambard を示説し、尙ほ最後に「フタレイン」法に關し二三の比色計を供覧せり。

12. 村田氏反應に就て

皆見省吾君

従來說かれたるもの以外の經驗を述ぶ。本反應は冬季に稍々成績悪しき故試薬を加ふべき食鹽水を 30°C に煖むれば良好なり。

驅膿療法後數箇月にしてワ氏反應陰性なるも本反應陽性となることあり。驅膿療法後脊髄液を検査すべきことを唱へらるるも、其代用として本反應のみにてても可ならん。即ち本反應は驅膿療法の良い指針たるべきものなり。

陳舊敵毒にてはワ氏反應を陰性にするこゝ至難の場合あり。之と同じくワ氏陰性なるも本反應の弱陽性を陰性ならしむるこゝ至難の場合あり。

陳舊敵毒にてワ氏陰性の時本反應陽性なるあり。之も本反應の良好なるを示すものなり。

Provokation (誘發反應) として従來ワ氏陰性なる時「サルワルサン」の注射に依りワ氏陽性となるこゝ既知なるも、斯る際最初ワ氏陰性なるに村田氏反應陽性なるべきものあるを例證せり。

併し村田氏反應は血清の濁濁せる時又は溶血性の時等判別困難にして又稀にワ氏強陽性の場合に弱陽性或は陰性なるこゝあるを以てワ氏反應と同時に施行するを安全とす。

13. 「プロームストロンチウムグルコーゼ」に就て

皆見省吾君

最近濕疹に對する臭素劑の注射流行し來り、Löwenfeld 氏が葡萄糖液に臭化「ストロンチウム」を加へて注射するこゝを唱へ、余は赤井藥局長に製作を乞ひ數十人に試み、就中急性濕疹に著效あるを認めたり。其他の痒痒性疾患或は神經症等にも效果あるこゝあり。

副作用としては注射直後に熱感あるも左程不愉快に非ず。神經質の人には稀に惡心の起るこゝあるも、其他の副作用は毫も認むる能はざりき。

14. 新麻醉藥「ソレスチン」に就て

皆見省吾君

輕き麻醉に適し外來用に可なり。小手術或は小兒の膀胱検査等にも適す。一時にかくれば飲酒家は興奮状態烈しきものあり。又満腹時には吐嘔を催すこゝあるも一般に危險少きもの如し。